

# 『魔の山』における結核とは何だったのか

高山秀三

## 要旨

『魔の山』は、主人公ハンス・カストルプがいとこの見舞いで訪れたダヴォスのサナトリウムでたまたま結核に罹患していることを発見され、7年間をそこで過ごすことになるという話である。この小説の根底にあるのは、ハンスの結核への罹患という現象である。ハンスは小説冒頭、ダヴォスに到着するや、高熱を発し、結核患者として療養生活に入ることになる。思いがけないかたちで結核患者となったハンスは、サナトリウムでの療養生活をありあまる時間と安楽な生活を享受できる機会として快く受け入れるが、その病状は7年間をとおして軽症と呼べるものだった。ハンスは結核への罹患のおかげで俗世の仕事から離れ、多くの医療関係者や結核患者との接触をとおして、人文学的な学びや人間観の深化を得ることになる。

『魔の山』は著者自身によって、また多くの読者によって主人公の自己探求を基軸とする文学ジャンルである教養小説とみなされている。この「教養獲得」の舞台はサナトリウムであり、その大本はハンスの結核である。しかし、ハンスの結核は担当医すらその正体がかめない、そもそも結核と呼べるかどうか怪しいものとして描かれている。ハンスは冒頭で「単純な青年」として紹介されるように、一見素朴な造船技術者であるが、その反面でロマン主義的な死や病への親近性をひそかに抱えている。ハンスの病は患者の獲得を欲するサナトリウムという株式会社と、もともと死と病への傾斜をもち、病者となることによってそんな自分にふさわしい自由な生活を得ようとするハンスが結託して作り出した架空の病という要素をもっている。マンはその自作解説で『魔の山』を「肺結核を土台に、その御旗のもとに更新されたドイツ教養小説」であり、そのパロディーであると語っているが、実はこの小説はその土台である主人公の肺結核そのものが内実には乏しいものであるがゆえに、その上にある小説世界そのものが虚実のあわいに立つような究極のパロディーなのである。『魔の山』の主人公の結核がどの程度真性のものであるかということは、これまで（特に日本では）あまり論じられてこなかった。本論はその点に焦点を当て、この問題が作品の内容に決定的に関わっていることを示した。

キーワード：『魔の山』、結核、サナトリウム、教養小説、パロディー

## 1. トーマス・マンと病

トーマス・マンは病のスペシャリストというべき作家である。生涯にわたって病が深く主題に関わる作品を描きつづけた。たとえば北ドイツのハンザ都市を舞台に代を追うごとに生命力を喪失していく大商人の一族を描く『ブッデンブローク家の人々』（1901）には多くの神経症者が登場し、その最後の男子はチフスで夭折して一族の歴史に終止符を打つ。『ヴェニスに死す』（1912）の主人公である謹厳なドイツの小説家は、旅先の保養地ヴェニスで美少年への愛に溺れていく過程で街に広がるコレラに感染して命を落とす。『魔の山』（1924）は結核患者が療養するサナトリウムを舞台としている。『ファウストゥス博士』（1947）では天才性を獲得す

るためにみずから梅毒に感染する音楽家の悲劇的な生涯が描かれる。さらに最晩年の『欺かれた女』（1953）は子宮癌による出血を女性としての復活と見誤る初老の女性の恋愛を主題としている。

これらの作品のほとんどは代表作といえるものであり、このことはマンの想像力が病気によってつよく触発される傾向を帯びていたことを意味している。しかし、70歳のときに肺腫瘍になって大きな手術を受けたほかは、マンは生涯をとおして生命に関わるような大病に苦しんだことはほとんどなく、80歳の長寿をまっとうした。それでいて日記の記述に頻繁かつ顕著にあらわれているように、激烈な歯痛や<sup>1)</sup>、起き上がることができないほどの胃腸の不具合、頭痛、不眠などマンはほとんどいつも身体の不調に苦しみ、生涯の多くの時間を病人、もしくは半病人であるという自覚をもって生きた。よく知られているようにマンは非常に神経過敏で、歯痛を除くその「病苦」の大半はその性格が大きくからんだ心身症や心気症の色合いが濃いものであるだろう<sup>2)</sup>。マンは比較的軽微な身体的変調であってもそれを過剰な感受性で増幅し、その結果、生涯をとおして心理的に病に近接する状態を生きたのである。ほぼ恒常的に身をもって病を生の一部として感じていた結果、それは創作にも反映され、病はマンの文学において非常に大きな比重をもつことになった。

本稿は病を扱うマンの多くの作品のなかから『魔の山』という「結核小説」に焦点を絞り、結核患者の集まるダヴォスのサナトリウムを舞台として演じられるこの特異な設定の「教養小説」において、結核という病がどのような役割を果たしているかを見ていきたい。この作品の主人公ハンスのなかには怠惰や安逸への傾向が抜きがたく存在しているが、その反面で秩序への志向や真摯な自己形成への意志もまた確実に存在している。ハンスは両者のせめぎあいのうちに7年間をサナトリウムで過ごすことになる。矛盾をはらんだハンスの性格特性とその結核のありようは深く絡み合っている。本稿はこの絡み合いを焦点として『魔の山』という「結核小説」をとらえることを主眼としている。

## II. トーマス・マンのサナトリウム体験

『魔の山』という「結核小説」の成立はマン自身の経験と大きく関わっている。カーチャ夫人は結婚後体調がすぐれないことが多く、単独でスイス各地のサナトリウムに滞在することが多かった。マンはたびたび妻のいるサナトリウムを訪ねたが、特に1912年5月から6月にかけて4週間<sup>3)</sup>、ダヴォスの森林サナトリウムに滞在し、その医療関係者や患者の生態をつぶさに観察したことが直接的には『魔の山』の構想につながった。このサナトリウムでマンは患者の生活を疑似体験するが、毎日の検温のなかで高熱が続き、院長に診察してもらおうと肺に異常があると言われる。サナトリウムで半年間療養することを勧められるが、マンはその忠告に従わず、妻をおいてミュンヘンの自宅に戻った。マンは、自伝的エッセイ「On myself」のな

かで、忠告に従っていたらどうなったかという想像から『魔の山』のハンス・カストルプの物語が生まれたことを明らかにしている<sup>4)</sup>。ちなみに4週間のダヴォス滞在で得たマンの体験だけでは長大な小説である『魔の山』のサナトリウムの活写は不可能であり、その不足を補ったのはさまざまなサナトリウムを転々としていたカーチャ夫人がもたらす情報だった<sup>5)</sup>。たとえばショーシャ夫人やベーレンス顧問官はマンが実際にダヴォス滞在中に見た人物がモデルになっているが、『魔の山』に登場するそれ以外のおびただしい人物やさまざまなエピソードは、カーチャ夫人が夫に宛てて頻繁に送った書簡が参考になっているものが多い。ハンスの病状や、ワクチンの投与などの治療についてもカーチャ夫人の実体験が参考にされているし<sup>6)</sup>、夫人からの情報なしで『魔の山』の成立はなかった。ダヴォス以外にもさまざまな療養地に滞在していた夫人は、それらのサナトリウムで配布されるパンフレットなども夫に送り、そこから得た情報も『魔の山』の執筆に活かされた<sup>7)</sup>。基本的には実在するダヴォス森林サナトリウムでのマンの体験が『魔の山』の中核的な部分を形成しているが、その上にさらに夫人が複数のサナトリウムで得た見聞や情報が加えられて、ダヴォスにあるとされる架空の結核療養所「ベルクホーフ」を舞台とする『魔の山』という作品が生まれたのである。

『魔の山』の成立の上でもう一つ重要な要素を付記しておく、マンの独身時代のサナトリウム体験がある。マンがサナトリウムを舞台とする小説を書くのは『魔の山』がはじめてではなく、短編『トリスタン』(1903)がこれに先行している。『トリスタン』の舞台となるサナトリウム「アインフリート」のモデルとなったのは、マンがまだ独身のころにしばしば神経症の治療などのために滞在した北イタリアガルダ湖畔リーヴァにあるサナトリウム「ヴィラ・クリストフォーロ」である。マンはこのほかにも独身時代から各地のさまざまなサナトリウムに滞在しており、そうした豊富な体験も『魔の山』の執筆に役立てられたと考えられる<sup>8)</sup>。

マンのそれまでの作品との関連で見ると、『魔の山』はかなり特異な相貌を帯びている。何よりも目につくのは、マンのそれまでの主要な作品の主人公が(あるいは以後の作品の主人公も)総じて孤独という宿命を背負った芸術家であるのに対して、『魔の山』の主人公は芸術家として設定されていないということである。ダヴォスに滞在したころ、マンは『ヴェニスに死す』を執筆中だった。これはマン自身を思わせるような一人の作家の悲劇的な愛と死を描く息詰まる内容のものだった。この執筆の最中に『魔の山』の構想が生まれたのだが、その最初期の構想において『魔の山』は、「『ヴェニスに死す』に対する一種ユーモラスな対照物」としての短編小説という控え目で気楽なものだった。(1913年7月24付エルンスト・ベルトラム宛書簡, 21-527) ハンス・カストルプは理科系の技術者で、小説の冒頭から語り手によって「単純な青年」(5.1-11)として紹介される。マンのそれまでの代表作にあらわれる芸術家タイプの人物はハンノー・ブッデンブロークにしても、トニオ・クレーガーにしても、またグスタフ・アッシェンバッハにしても孤独に悩み、この世の生き難さに呻吟する深刻な人物像だが、ハンスは怠惰で、確固たる意志をもたず、温和で呑気な気質の人物である。こうした主人公の人物

設定はおそらく作者マンにとってそれほど内的必然性も切迫感もないもので、「一種ユーモラスな対照物」を書くという計画に適合したものだだった。

マンはあるときは『トニオ・クレーガー』や『ヴェニスに死す』、『ファウストゥス博士』のような、自分自身の生の問題の探求を主要動機とする深刻な小説を書くが、また別のときはそうした深刻さから逃れるように『フェーリクス・クルルの告白』や『ヨゼフとその兄弟』のような遊び心にみちた諧謔味のある小説を書く作家である。中間者の精神としてのイロニーを標榜していた(13.1-620)この作家は、対照的なタイプの作品をほぼ交互に書くことで精神の平衡を保っていた。『ヴェニスに死す』という芸術家を主人公とする最高度に内的必然性のつよい、息苦しい作品のあと、マンは一転して自分と違う、ものごとをあまり深刻に考えない非芸術的な人物を主人公に据えた作品に向かったのである。しかし、作家が自身とかけ離れた人物を主人公にして描くことには、感情移入の乏しさゆえに作品の生気が失われるという危険がある。傑作と呼ばれるほどの作品が成立するためには、主人公は作者の感情移入を可能にする程度には作者に近い存在である必要がある。『魔の山』という小説を成功させるためには、主人公は作者と遠すぎてはだめで、近さと遠さの微妙なバランスが必要だった。実際、ハンスは一方で作者から遠いが、他方では作者に近い存在にもなっている。開巻劈頭、「単純」と形容されながら、ハンスの性格は物語が進むにつれて、その規定と反対の複雑さを次第に明らかにする。まずは「単純」なはずのハンスを少なからぬ陰影を帯びた、作者に近い存在にしているものが第2章の、生い立ちの記述で明らかにされる。

### III. 結核患者になる

実は、ハンスは死への共感と虚無的な心情を心の奥底に秘めた青年である。ハンスは幼くして両親を亡くした孤児であり、高齢の祖父に引き取られたが、その祖父もまたまもなく死んだ。幼いハンスにとって死は「すでにまるっきり馴染みのものになって」(5.1-45)いた。ハンスは幼くして死に親和性をもつようになっていたのである。ハンスは貧血気味の体質で、育ての親となった大叔父ティーナッペルの言葉でいえば「ほんやりさん」(5.1-50)と呼ばれるような夢想的な性格だった。ハンスは上流市民らしい品位のある立ち居振る舞いをするが、その性格は勤勉とはかけはなれたもので、プロテスタントらしく仕事に対しては非常な敬意を払っているものの、必死に努力するなどということは「おおよそやりそうもないことだった」。(5.1-53)こうした性格は実社会で身を粉にして働くよりは、美味な食事とさまざまな気晴らしが提供され、終日ゆったりとした時間を送ることができる快適なサナトリウムで療養することに適している。

もともとハンスがベルクホーフを訪れたきっかけは、そこで療養したいとこの軍人ヨアヒムへの見舞いだった。ベルクホーフの所長であるベーレンス顧問官は、ハンスがまだ見舞客

のときから療養所の環境にうってつけの患者候補であることを見抜く。37度5分以上の熱が続くのでハンスはベーレンスに診てもらおうが、聴診器による診察の結果、胸の濁音が発見された。それはベーレンスによれば、肺に浸潤があるということで、サナトリウムでの長期療養が最善であることを意味する。ベーレンスは嬉々として、以前から「私はあなたに注目していました」(5.1-275)と言い、「私は実は一目で、あなたがその旅団長殿(=ヨアヒムのこと——論者注)よりも優秀な患者さんで、病気の才能があることをすぐに見てとりました」(5.1-278)と語るのである。ベーレンスは陽気で話術に長けており、患者をくすぐるような言葉を繰り返しながら、ベルクホーフでの長期療養へと患者を誘導する。もちろん、そこに株式会社であるこのサナトリウムの経営を任された管理者としての動機があることはいまでもない。ベーレンスの商売人根性はハムブルク出身のハンスと出会って早々の、「いや、あのハムブルクというのはまったくありがたい町だ。あそこのじめじめした気候のおかげで、私たちにも大層な実入りがあるんですからなあ」(5.1-74)というあけすけな科白で表現されている。ハムブルクは結核患者が多い土地柄で、ベルクホーフに来る患者は少なくないのである。

滞在初期のハンスの発熱の原因は、主として高山の空気をもたらしたものであったようである。ベーレンスは言う、「この空気は病気を治す、とあなたはお考えでしょう。……たしかにそれは本当です。しかし、この空気はまた病気を引き起こしめるのです。いいですか、まず病気を促進し、からだを作り直し、潜んでいる病気を噴出させる。あなたのカタルも、……その噴出なのですよ」。(5.1-277f) ハンスはなかなかダヴォスの空気に慣れることはなく、発熱しつづけた。

ハンスの発熱にはもう一つの重要な原因として、ベルクホーフに滞在しているロシア女性ショーシャ夫人を知ったことが関わっている。夫から離れて一人で療養生活を送っているこの女性にハンスの注目を向けさせたのは、その振る舞いの天衣無縫というべき闊達さと、無作法でありながら優雅であることから来る独特な魅力だった。ハンスはその無作法に憤激しつつ、アジア的なその容貌につよく惹かれていく。ショーシャ夫人への関心は、実はハンスがジムナジウムのときに愛した同級生ヒッペに対する同性愛的感情が歳月を隔てて再燃したものであった。ヒッペは東方に由来をもつ少年で、「キルギス人の目」をもつ点で性こそ異なるがショーシャ夫人によく似ており、ハンスの無意識においてはヒッペとショーシャ夫人は同一の存在ということになる。ハンスはその目に魅せられ、「理性がなくなるほど夢中になって」(5.1-925)しまうのである。その思いが発熱を引き起こす。たとえばベーレンスが個室でショーシャ夫人をモデルにして肖像画を描いているという噂を聞いたあと、ハンスの体温は嫉妬で37度7分にはねあがるのである。(5.1-317)

ハンスのうちには投げやりな精神態度があったが、これもまたハンスをサナトリウムでの怠惰で安楽な生活に向かわせたものである。その特性はおそらくは生い立ちからくる死への親和性に関わるものだが、同時に語り手はそれを時代精神のなかにある虚無と結びつけている。す

なわち現にハンスの生きている20世紀初頭の第一次大戦前の時代は「外見上どんなに活気であろうとも、根本的には希望も展望もまったくない」(5.1-54)時代であると総括しつつ、語り手は「このような状況はふつう以上に誠実な人間にあっては一種の麻痺を引き起こさずにはないだろう」(ebd.)と語るのである。このことと関連して、ハンスがサナトリウムに滞在しつづける動機のなかには、自己を見つめ直すのにふさわしい環境のなかでみずからのうちにある精神的な問題をあらためて検証しようという意図があった。実際、ハンスはその療養生活を通じてサナトリウムに滞在する知識人などと交流し、思想的探究の道に入るのである。ハンスは安逸に流れやすい性格であり、語り手もその性格に「誠実」という語を当てる際にわざわざ「ふつう以上に」という限定的な表現を加えている。しかし、好意的に見れば、それでも彼なりの誠実さをもって自分と、自分が置かれている時代の状況を見極め、自分の方向を探ろうとする欲求を抱いており、それが日常的な市民生活から離れたサナトリウムで顕在化したのである。サナトリウムを訪れた際のハンスの精神状態については、幼年期から多くの死を身近に見てきたために身についた死への親近性や、時代の虚無を反映した「一種の麻痺」状態にあったという以上のことは明記されてはいない。しかし、肺に軽微な異常を発見され、サナトリウム滞在を勧められたことは、もともと熱意がもてなかった実社会での仕事を棚上げにして自身を振り返るための絶好の口実となった。

ハンスはダヴォスに到着したときは3週間の滞在の予定で、そのあとは故郷ハムブルクで造船技師として働く予定だった。ところが、すでに述べたようにサナトリウムの所長ベーレンスの診断で肺に浸潤箇所があるとされ、このまま「下界」に戻れば「あなたの肺葉はすべて破壊されてしまいます」(5.1-277)と脅されるや、ハンスはいささかの迷いもなく、たちどころに長期療養に入ることを宣言する。そこで、ベーレンスはハンスの「病気の才能」(5.1-278)を讃え、助手のドクトル・クロコフスキーは露骨に喜び、「心をこめてハンスの右手を握りしめた」(ebd.)。このあとハンスは、早くから家族の死に次々に遭遇したこと、そこから来る生の裏面への親近感があったことをあらためて回想し、自分が「もともと病気と親しい関係」(5.1-283)なのだという感傷をいとこのヨアヒムにしみじみと語る。ところが、これを聞いたヨアヒムは、万事冷静な軍人らしく、ハンスの肺の病巣は軽いもので、「下界」で暮らしたとしても「ひとりでに治ってしまうものかもしれない」(ebd.)と即物的に応じ、ハンスの感傷に冷や水を浴びせるのである。

#### IV. 悦楽の園

結核は非常に古くから人類とともにあった病だが、ヨーロッパで猖獗をきわめるようになったのは18世紀後半のイギリス産業革命以後のことである。都市における工場労働者の過酷な環境と彼らが形成するスラム街の密集と不潔のなかで結核は爆発的に広がり、しかもきわめて

大きな確率で死につながる病として恐れられるようになる。劣悪な環境で生き、十分な医療を受けられない貧困層では結核はほぼ死につながる悲惨なだけの病だった。しかし、蔓延する結核菌はさらにそうした劣悪な環境と無縁の特権的な階層の人々をも冒すようになり、そうなるに結核は特別な文化的意味を帯びることになる。結核は死に親近性をもち、これをしばしば美化する傾向のあるロマン派によってさまざまな「詩的」イメージを付与された。憂愁にみちたロマン派的な観点において結核は精神性を高め、天才を促進する病として倒錯的な憧憬の対象となる。『魔の山』はそうした結核についての美化されたイメージが生きていた時代を背景にしている<sup>9)</sup>。産業革命以後猛威を振るいつづけ、1944年のストレプトマイシンの発明とともにほぼ終息した結核は、近代という時代の裏面をよくあらわす病である。進歩と合理主義を標榜する近代の裏側の現象として発生した結核は、やがてそれがスラム街を越えて中流や上流階級の人々を冒すに及び、芸術界および芸術に親しむ人々のあいだに広がるロマン主義的な「地上の生に対する嫌悪」<sup>10)</sup>と結びついて芸術家の病気となったのである。

『魔の山』の舞台となるダヴォスは1841年ごろから結核患者の療養地として有名になった。当時はほかに有力な治療法がないこともあって、よい環境でひたすら安静に努めるサナトリウム療法が唯一の治療法であるということになった。スイスは高原療養所のメッカになり、とりわけダヴォスはその中心になった。高地のサナトリウムでは次第に大気療法がさかんになり、ダヴォスを中心とした「サナトリウム産業」では傷んだ肺に良いとされる新鮮な高原の空気が売り物となった。『魔の山』はこうしたサナトリウム産業の最盛期を舞台とする小説である<sup>11)</sup>。『魔の山』で描かれる結核医療の対象は、サナトリウムの高価な医療に耐えられるだけの裕福な人々に限られている。

菌が発見される以前、結核の原因については感染性という意見もあったが、そうではなく「長い情熱と深い悲しみ」が原因であるとする見解もあった<sup>12)</sup>。結核は早くからロマン派的な情緒性と結びつけて語られることの際立って多い病だったのである。『魔の山』がこのような「結核神話」を背景として成立した作品であることについてはスーザン・ソントグが次のように語っている。

ほぼ二世紀にもわたって反駁する余地のない経験と医学的知識とが蓄積されてきたにもかかわらず、この結核の神話は、倒錯的とも思える多くの願望を正当化し、それを文化的に敬虔なものとしてしまうことによって、生きのびてしまう。19世紀の後半に到って、世紀初頭のロマンティックな病気崇拜に対する反動が起こったのは事実であるが、それでも結核はロマンティックな属性のほとんどを——たとえばすぐれた性質の目印だとか、その性質に似つかわしい脆弱さの目印だとかいう性格を——世紀末を越えて今世紀に到るまで保持してきている。……（中略）……『魔の山』のアイロニーの多くは鈍重な市民たるハンス・カストルプが芸術家の病気である結核にかかることから生ずる——マンの小説

は結核の神話に対しての、遅れて来た意識的な注釈であったわけである。<sup>13)</sup>

ベルクホーフは患者が退屈しないように、さまざまな気晴らしの工夫をこらしている。日曜日は2週間ごとにコンサートが催され、患者たちはそれぞれに着飾って楽しんだし、患者たちの誕生日、総合診察、出発などは「お祭り騒ぎと乾杯の口実」(5.1-622)となった。『魔の山』には、病気が満たされない愛の産物であると説く滑稽な精神分析医が登場する。その医師クロコフスキーは定期的に開催する講演で患者たちに向かって抑圧された愛の危険を説く。クロコフスキーは「許されず、抑圧された愛がふたたび現われ得るときの姿、その仮面はどんなものでしょうか？」(5.1-195)と問いかけ、圧倒され固唾を呑む聴衆に向かって、「それは病気なのです。病気の症状は仮装した愛の活動であり、あらゆる病は仮装した愛なのです」(5.1-196)とおごそかに告げる。『魔の山』で語られるクロコフスキーの理論は俗流精神分析とっていいものである。そもそも『魔の山』執筆時のマンの精神分析についての理解は、特に当時の知識人の平均的レベルを大きく超えるものではなかった<sup>14)</sup>。実は、クロコフスキーのような汎性欲主義とでもいうべき病気観は精神分析以前から存在するものであって、17世紀ごろにはすでに「欲求不満」や「恋に破れること」を肺結核の原因とみなす考え方が多くの医者によって語られていた<sup>15)</sup>。医者だけでなく、文学者においても結核が「情熱」の過多によって生じると考えられていた点については、ソントグもジッドの『背徳者』やヘンリー・ジェームズの『鳩の翼』を実例として挙げながら語っている<sup>16)</sup>。

『魔の山』のサナトリウムでは、医療従事者と患者が一体となり、結核という病によって日常から隔離された閉鎖的で非日常的な空間をかたちづけている。その放埒でいかがわしい空間を象徴するような女性がロシアから来たショーシャ夫人である。『魔の山』の文脈において、ロシアは自由奔放を含意しており、夫人自身がカーニバルでのハンスとのフランス語の会話でドイツ人の秩序への執着に対比して自分たちは自由を尊ぶ民族だと語り(5.1-508)、病気であることは自分にとって自由を保証するものだと言ってサナトリウム生活を讃える。(5.1-512)

サナトリウムは本来治療の場所でありながら、治療への意欲の大元である現実への関心そのものを失わせていく。ほとんどが富裕層からなる患者たちは現実的な苦勞から全面的に解放され、一日五回の豪華な食事を楽しむ。患者同士の歓談や恋愛遊戯などもさかに行なわれ、ゴシップが婦人たちの大きな関心を奪っている。バルコニーづたいに部屋から部屋へ行くことができる建物の構造も手伝って、患者同士の情事が頻繁に行なわれている。結核は性欲を高めるという通説については、院長自身がそれを認めていて、頻繁に起きる男女の悶着にうんざりしつつ、「肺結核が特殊な性欲と結びついているからといって、私がどうしたらいいというんでしょうか？」(5.1-628)とかこってみせる。ベルクホーフでは本を読むなどというのは一種の野暮と考えられていたので、患者たちは長く滞在するにつれて次第に本を読まなくなるが、一人の患者が持ち込んだ『誘惑の技法』という「肉欲と官能の哲学」の本は男女を問わず、多く



の患者の関心を引き、取り合いで大騒ぎになるほどだった。(5.1-413) 享乐的でときに狂騒的  
とさえいえるような雰囲気にあふれているのは、病気の不安の裏返しかもしれないが、一見し  
たところは安逸と放埒を貪るだけのような態度の患者が多く見られる。

ベルクホーフの好色な環境については、たくさんの実例が語られ、ベーレンスは自身を「売  
春宿の親爺」(5.1-628)と自嘲する。実はこうした風潮にはクロコフスキーの「精神分析」が  
大いに影を落としている。すなわち、愛が抑圧されて病気になるという理論を逆からいえば、  
愛を解放すれば病気は治るということになるから、病人たちは回復するためという口実でせつ  
せと情事に励むことができる。実際、アミーという若い娘は脚が美しいと評判のギリシャ人化  
学者と情事にふけり、しかもそれを目撃した同性の友人が嫉妬に狂って大騒動を引き起こす  
が、ライバル関係の娘たちは二人ともクロコフスキーの「精神分析」を受けていたのである。  
ハンスはベルクホーフに到着早々、ショーシャ夫人に惚れ込んでしまっていたので、はじめて  
クロコフスキーの講演を聞いたときは大きな感銘を受け、近くに座っていたショーシャ夫人に  
見入ってしまう。(5.1-196) 後にはヨアヒムにも内緒で精神分析を受けることになる。

ベーレンスはベルクホーフの管理を任されているが、実質的な経営者は別に存在する。この  
サナトリウムは医療者には高給を払い、株主への配当も相当に有利ということで順調な経営を  
つづけている。ベーレンスが倫理的に問題のない人物といえないことについては、この小説で  
ハンスの師匠役になるイタリア人セテムブリーニがハンスに語っている。それによると、ベー  
レンスは顧問官という尊称で呼ばれているのだが、その経緯にはいかがわしい事情が潜んで  
いるという。すなわち、さる国の王子はベルクホーフでの療養中、今でもこの土地の語り草にな  
るほどの数々の不品行で鳴らしたが、ベーレンスはそれらの一切に「両目をつぶり」(5.1-97)、  
そのおかげで顧問官の称号を得たというのである。(ebd.) そもそも妻を結核で失った寡夫で  
あるベーレンス自身が露骨に好色な話しぶりをする人柄で、ベルクホーフに来たてのハンスの  
気を引こうとして「ご婦人方に不自由することはありませんよ。——ここには最上の女性たち  
がいっぱいいますからね」(5.1-74)と語り、サナトリウムの楽しさを強調している。それど  
ころか、ベーレンスには絵の趣味があるのだが、すでに述べたようにそのモデルとしてショー  
シャ夫人を個室に招き入れている。しかもベーレンスは夫人の腕のレントゲン写真をハンスに  
見せながら、その「かわいらしさ」(5.1-327)を語り、好意を隠さない。ちなみにショーシャ  
夫人についてはロシア人の男性との噂もあり(5.1-316)、ベーレンスとの関係もただならぬも  
のである可能性は十分にある。

ベーレンスを頂点とするベルクホーフの管理体制ははなはだ心もとない。患者の一人が女性  
患者の気を引こうとして狂言自殺のような大騒ぎを引き起こし、そのおかげで振り回された女  
性患者たちの病状が悪化しても当事者が罰せられることはない。(5.1-126) 規則の順守に一貫  
性がなく、スポーツは厳禁のはずなのにテニスやスキーは見逃されたり、ポーカーは厳禁なの  
に誰も守らない。(5.1-114) ハンスもひそかにスキーを実践し、かつてスポーツマンだったこ

ともないのに瞬く間に上達してかなり遠出もした。多くの患者は放埒な生活をしてみずから病気を悪化させているくせに、サナトリウムに対しては費用対効果を求め、元手に見合うだけの治療を要求する。陽光が少ない日々が続くと、サナトリウムの案内書が謳う気象学的療養効果が得られないということで、患者たちは「彼らの療養費、両親や夫たちが彼らのためにまかってくれた費用を話題にし、食卓でもエレベーターでも広間でもぐちをこぼす」(5.1-706)のだった。患者たちのこうした無軌道ぶりや勝手な態度はもちろんベーレンスの管理のゆるさと同様である。そもそもベーレンスは陽気で愛想がよい反面、気分の変動が激しく、常に顔色が悪く、泣いたような目をしていて、憂鬱に取りつかれることもしばしばで、管理者としては問題のある人物である。その話しぶりも「完全に普通というわけではなく」、「そこには奇妙で常軌を逸したもの」(5.1-227)があった。孤児であるハンスはサナトリウムでも「父親的な権威」を欲していたが、ベーレンスについて「子どものような信頼感をもって考える」(ebd.)ことはとてもできることではなかった。口のうまいベーレンスはいつまでも発熱が続くハンスを口説いてさまざまな療法を行なったが、すべてはほとんど無効だった。たとえば療養生活も終わりに近い頃、ハンスへの検査で連鎖状球菌が発見されたので、ベーレンスは「絶対に有望です」(5.1-963)と請け合ってワクチン注射を打ったが、効果は皆無だった。

すべてに両面的であるハンスは安逸に浸るのが好きな一方で、「苦悩と死を真剣に受けとめ、尊重したいという精神の欲求」(5.1-449)を抱いている。そこで、ベルクホーフの住民たちのなかにいる「正直なところはまったくどこも悪くないのに、軽い疲労を表向きの口実にして、ただ自分の楽しみで、病人の生活が性分に合うので、まったく自分の意志でここに暮らしている人々」(ebd.)をサナトリウムの品位を傷つける存在として感じていた。ベルクホーフの患者管理の悪さを如実に示すのは、ごく軽い症状だが親が大事をとってベルクホーフに送り込んだ「指の爪を伸ばした少年」である。この少年は徹底して愚かな生活ぶりですれ違ひざまに奇妙な音を聞いて驚くが、それが気胸療法によってガスを詰めた肺から人を驚かせようとしてわざと出す音であることをヨアヒムから聞いて知る。ヨアヒムはこの一団が「片肺クラブ」を名乗る患者たちであることを教え、その不可解な明朗さをいぶかるハンスに次のように説明する。

あの連中はとても自由なんだ。……みんなすごく若いよね。時間なんか気にしないし、もしかしたらみんな死ぬかもしれない。まじめな顔をしてもしようがないんだ。僕はときどき考える。病気や死は、本当は大したことじゃなくて、ぶらぶら歩きのようなものではないだろうか。大事なことは厳密に言えば、下界の生活にだけあるんじゃないかってね。(5.1-81)

ハンスはもともと結核あるいは病についてロマンチックな印象をもっていた。そこで食事のときに同じテーブルに居合わせたシュテール夫人というドイツ女性がきわだって無教養で下卑していることに驚き、「ある人間が愚かで同時に病気であるというのは、僕にはとてつもなく奇妙に思われる」(5.1-149)と語っている。しかし、ベルクホーフの結核患者たちの大半は、シュテール夫人ほど極端ではないにしても、ロマン主義が結核について思い描いたような芸術的な感覚をもつ繊細な文化人ではなく、無教養で野卑な俗人である。

サナトリウムについても、到着間際のハンスには美化された先入見があったにちがいないが、当時、少なからぬ人々が抱いていたと思われるそうした観念について参考になるのは、フランスの医学史家サンドライユが結核が猛威を振るった時代にサナトリウムがもった文化的な意義について記した次のような叙述である。

それ(=結核——論者注)は若者に突然襲い掛かり、彼らを高揚させ、またそれだけ彼らを打ち倒していった。……(中略)……それは全ての歴史のしがらみと全ての物質的悩みから彼らを解放することによって、若者たちを全ての家族的社会的責任から切り離れた。その結果、彼らはエリートとして寄り集まり、その長い余暇は、思想の開花と理想美の好ましい達成のために費やされたのである。<sup>17)</sup>

ここには、19世紀末から20世紀において、結核がロマン主義的な意識と結びついて醸成した文化的な雰囲気表現されている。しかし、既述したように、ベルクホーフに集う患者たちもしくは療養客の大半は、この叙述でいわれるような文化エリート的な存在からはほど遠い人々である。シュテール夫人の無教養に対するハンスの驚きは、サンドライユが語るような結核患者たちのサロンのイメージと現実のサナトリウムの落差を集約的に物語っている。

ベルクホーフは結核療養所として死にきわめて近い場所であり、ハンスも到着早々、滞在用にあてがわれた部屋で先住の女性が死んだばかりだという話をいところから聞かされている。ところが、病死した患者たちの後始末は人目につかぬよう極秘のうちに処理され、ほかの患者たちが死を意識させられることがないように配慮されていた。(5.1-83)多くの患者はベルクホーフの放埒で享楽的な生活を楽しんでいたし、もともと怠惰と安逸を好むハンスも当然のようにその弛緩した気楽な生活に順応した。食堂内の様子は到着直後のハンスの予想に反して至極にぎやかで、食堂では「狼のような食欲が支配していた」。(5.1-117)患者のなかにはサナトリウムの生活が気に入り、完全に治癒してもなお、そこに滞在しようとして熱をごまかして報告したり、極寒の湖で泳いでみずから病気を悪化させようとする者までいた。(5.1-135)

患者にとっては療養に専念することが肝要であり、仕事をするという平地においては当たり前前のことが免ぜられている関係で、野放図に自由な時間がそこに広がっている。ハンスは学校時代に落第した経験を最初の3週間のあいだに思い出すのだが、それはハンスにとって「痛快

な境遇、いくらか屈辱的ではあるが、ユーモラスで、ほったらかされた快適な境遇」(5.1-125)だった。サナトリウム生活は、その落第生の境遇に類した、「平地の人類の喜びと労苦を断念した代りに、活気はないが、まったく呑気で楽しい生活」(5.1-707)である。ハンスはベルクホーフに滞在している間に世事への関心を失い、新聞も読まなくなる。(5.1-379)さらには、仕事、家族、故郷への関心全般を失っていく。ハンスは本についても、人文系にはあまり関心がないようで、工学関係や造船関係の本を故郷から送ってもらって勉強していたが、ショーシャ夫人への思いで頭がいっぱいになってくると、その肉体への関心が技術者らしいかたちをとったかっこうで「解剖学、生理学、生物学の書物」(5.1-415)を夢中で読みふけていた。

## V. 啓蒙主義者セテムブリーニのサナトリウム批判

『魔の山』にはハンスの教育係をみずから買って出るおせっかいなイタリア人が登場する。啓蒙主義者の文筆家セテムブリーニであるが、この人物は徹底したサナトリウムの批判者である。セテムブリーニはサナトリウムの医療関係者たちにはシニカルな視線を送っていて、彼らがハンスをサナトリウムに居つけさせようとするのを策謀のように語ってハンスに早期の退所を勧めつづける。到着早々の知り合ったばかりのハンスにセテムブリーニは「この悦楽の園でのご滞在初日」(5.1-131)の感想を皮肉を交えて尋ね、ハンスが熱があるようだと言っていると、早くも長居の気配を感じとって「今夜にでもまた荷造りをされて明日の定期便急行列車で出発なさっては」(5.1-133)と忠告する。所長ベーレンスを揶揄して「悪魔の手下」(5.1-95)と呼び、もっともらしくなされるその診断に大いに疑念を示す。ベーレンスに言われて滞在を延長するたびにどんどん症状が悪化し、5ヶ月間療養に励んだ挙句に「ここの気候はあなたには合っていないようですな」(5.1-298)の一言で片づけられて大いに怒ったロシア婦人の話をハンスに聞かせたり、肺の空洞に見立てられた斑点が単なる現像技術上の間違いにすぎなかった過去の実例を挙げて、レントゲン写真のあてにならないことを主張する。レントゲン写真に写る影が正確に結核を証明するものであるかどうかを疑っていて、写真に空洞が写ったために手術を受け、それがもとで死亡したが、死後の解剖の結果、「肺はまったく正常で、死因は球菌か何かのせいだった」(ebd.)ことが判明した病人の話などをする。理性の信奉者であるセテムブリーニは医療者の権威を疑い、その内幕を疑惑の目で見、サナトリウムが欺瞞の巣であると主張している。セテムブリーニはサナトリウムに居ついでしまう若者たちの生態について次のように語り、サナトリウム生活によって「人生から落ちこぼれる」(5.1-302)危険性をハンスに警告する。

ここへやって来る若者たちは遅くとも半年後には異性といちゃつくことと、体温のことを考えるだけになります。そして1年後には、ほかのことは一切眼中になくなり、異性と

体温のこと以外はすべて「残酷」、あるいはもっといえば、間違いであり無知であるとまで感ずるようになるのです。(5.1-302)

医療関係者と患者がほとんど無意識で結託して作りあげているこの浅ましいようなベルクホーフの環境は、繰り返すことになるが、ロマン主義的に美化された繊細で知的な結核患者が集うサロンからはほどとおいものである。セテムブリーニや、後に登場するイエズス会士ナフタは少なくともその知性によって、ハンスは少なくともその知的的好奇心において、そしてヨアヒムは少なくともその義務観念において、サナトリウムの構成員の大半をなす俗衆と一線を画す選良といえるが、こうした卑俗でない思考を少しでももつ人間がベルクホーフにおいて圧倒的な少数派であることは、平地の健康人の世界における以上であるかもしれない。しかし、ハンス・カストルプに関する限りでは、本人の精神的探究への意欲もあって、ベルクホーフで得る文化的な刺激はハンスの思想的教育係といえるセテムブリーニやイエズス会士のナフタとの接触だけでも相当なレベルのものがある。

ベルクホーフのモデルとなったダヴォス森林サナトリウムや、バーレンスのモデルとなった所長イエッセンの実際のところがどうであったかはともかくとして、『魔の山』に描かれた架空のサナトリウムは、医療関係者も患者も含めて全体がいがわしい雰囲気包まれている。そうしたなかで、啓蒙主義者セテムブリーニはベルクホーフ全体の徹底した批判者である。ベルクホーフだけでなく、セテムブリーニの批判精神はサナトリウム一般、さらには医療界全般に及んでいる。セテムブリーニのサナトリウム批判のきわめつけは、カフカ教授というベルクホーフの近所にある別のサナトリウムの医師に向けられる。この医師はたくさんの退院希望者が出る季節になると旅行に出発し、途中でそれを大幅に延長し、患者たちの入院費が大きく嵩んだころになってようやく戻ってくる。またザルツマンという医師のいるサナトリウムでは、患者に葡萄酒を大量に飲ませて儲けているが、そのために多くの患者が肝硬変で死んでいくという。(5.1-98) 啓蒙主義者としての懐疑からだけでなく、セテムブリーニはベルクホーフの住人としてはあまり裕福でないという経済上の理由もあって、とりわけこうしたやり方に批判的である。寒がりということもあって、サナトリウムが雪のとき以外は暖房を入れない節約主義を非難して、「(ベルクホーフの——論者注)療養原理は、権力者たちの経済的利害に合致するものだけなのです」(5.1-147)と痛烈に批判する。商売上の理由から患者の死亡率が高くないように、回復の見込みのない高熱の患者を受け入れないようにベルクホーフが決定したことも早耳で聞きこんできてふれまわる。(5.1-232)

しかし、セテムブリーニは、医療関係者のみが悪いのではなく、病人もまた病気に対するキリスト教的な同情、「悲惨に対するキリスト教的敬意」(5.1-679)という一般に流布している迷妄を利用し、病気を口実としてその上に居座っている、その「最上の事例はこの上の肺病患者の連中」であり、「その軽薄、愚昧、放埒、健康になることへの善き意志の欠落」(5.1-680)

であると慨嘆するのである。ハンスのなかにも病気を美化し、療養生活に馴染む傾向があるのはすでに見てきたとおりで、それゆえにセテムブリーニはハンスが軽症でベルクホーフに居座ることに警鐘を鳴らしつづける。ヨアヒムはハンスとは対照的に、その軍人的な生真面目さと勤労意欲ゆえにハンスよりはるかに重症なのにベルクホーフを心底から嫌い、ペーレンスがまた戻ることになると引き留めるにもかかわらず、退院して軍隊に復帰してしまう。セテムブリーニと並んでベルクホーフにおける道德破綻の例外であるヨアヒムは、サナトリウム内の誰からも好まれ、「この上では一番良い人間」(5.1-756)と思われていた。作者もその軍人らしい篤実さを好んでいて、ウィーンの作家シュニツラー宛の手紙で「最上の人物」と称揚している。(1925年1月9日付書簡, 23.1-116)

セテムブリーニは、精神分析がサナトリウムで果たしているいかがわしい役割ゆえに、常々クロコフスキーを痛烈に批判する。セテムブリーニは精神分析そのものを否定しているわけではなく、「愚劣な思い込みを揺るがし、よくある偏見を解消し、権威の土台を掘り崩す限りでは」それは「良いもの」だが、「行為を妨げ、生命を形成する力をもたず、むしろ生命の根を破壊してしまうのであれば」、それは「非常な悪」だと言うのである。(5.1-338) セテムブリーニの指摘どおり、ベルクホーフにおいてクロコフスキーが主導する精神分析は、病人同士の恋愛遊戯をいたづらに使喚し、快癒させて社会復帰させるよりはむしろサナトリウムに居つかせてしまう結果を生んでいる。実際、ハンスのショーシャへの恋愛も社会復帰につながるどころか、ショーシャゆえにベルクホーフに居座りつづけるという結果をもたらしている。

マンは自伝的エッセイ「On myself」のなかで、『魔の山』のベルクホーフについては、そこで行なわれている「ある種の医療の手管、雑な言い方でいえば、裕福な患者を食い物にするやり方」<sup>18)</sup>を描いたと語っている。だとすれば、セテムブリーニのサナトリウム全体への反感、特に医療関係者への懐疑には、マン自身のそれらが反映していると見ていいだろう。マンは自分は「医学の崇拜者であり讃美者」であると (*Vom Geist der Medizin*, 15.1-1002) と語っており、実際、若年期は神経症の治療でサナトリウムにいたことも多く、その後も心気症的な傾向から来る身体面の不調もあって多くの医師との交流をもっていた。医学への関心や知識もあり、自分は医者になる可能性もあったと語るほどだったが<sup>19)</sup>、他方では万事に懐疑的な性格から医療関係者の裏面もよく見ていたのだろう。カーチャの見舞いでダヴォス森林サナトリウムに滞在したときに、医師が半年の滞在延長を勧めるのを断ってすぐにミュンヘンに戻ったのも、その診断に意図的な誇張の臭いを嗅ぎつけたからだろう。カーチャによれば、この滞在延長を勧めたのは作中のペーレンスに相当する医師イエッセンであるが、マンがそのことをミュンヘンのかかりつけ医に伝えたところ、「あなたに病気があるというのであれば、ダヴォスで診察を受けて病気がみつからない人間は一人もいないでしょう」<sup>20)</sup>という返事を得たので、即刻ミュンヘンに帰宅したとのことである。医療関係者との接触が多かったマンは信頼できる医師に何事も相談したり、あるいはさまざまな医師の意見を比較考量するなどして、自分

の身体について慎重な判断を下すという習慣を身につけていたにちがいない。当然、その経験からあてにならない医師を選別する鑑識眼ももっていたと思われる。

もちろん、ベルクホーフについてセテムブリーニが語るような腐敗が、そのモデルとなったダヴォス森林サナトリウム、引いては当時のサナトリウム全体にあったと見ることには慎重でなければならない。カーチャ夫人の後年の回想によれば、ベーレンスのモデルとなったイエッセンという所長をはじめ、ダヴォス森林サナトリウムの関係者はベルクホーフの描き方に激怒した<sup>21)</sup>。マン自身の言では、この小説は医学界で「小さな嵐」(*Einführung in den „Zauberberg“*, XI-613)を巻き起こしたが、その中身は賛成と憤激の両論だったということである。

## VI. 理性的なイタリア人と奔放なロシア女性

『魔の山』は二部に分かれているが、第一部はハンスのショーシャ夫人への愛とそれを阻止しようとする啓蒙主義者セテムブリーニの対立を軸として進んでいく。セテムブリーニは少なからず退嬰的で安逸に溺れやすいハンスにサナトリウムに居つづけることの危険を説き、その滞在の大きな原因であるショーシャ夫人への接近を妨げようとする。内気なハンスはショーシャ夫人への思いを募らせつつも長い間、話しかけることができなかったが、滞在7ヶ月を経たカーニヴァルの無礼講的な雰囲気の中なかでようやく愛を告白し、その夜、二人は結ばれる。セテムブリーニは一敗地にまみれたわけで、その後すぐに経済的な理由からか、あるいはハンスの愛を抑止できなかったことに対する失意のゆえか、おそらくは両方の理由からサナトリウムを去って近くの下宿に移ることになる。ちなみにショーシャ夫人はカーニヴァルの翌日、一時的ではあるがサナトリウムを去り、ハンスは夫人の帰りを待つことになる。

将来的にサナトリウムを去る見込みがないほど重症であるにもかかわらず、セテムブリーニはサナトリウムの医療体制への不満を越えて、病気そのもの、病気がもたらす退廃に嫌悪を抱いている。理性を至上の価値とするセテムブリーニにとって病気は理性に反するものである。セテムブリーニの価値秩序の中なかでは、病気は死や無秩序、野蛮、退廃、感傷、東方、ロシアなどの概念と同じ劣位のカテゴリーに属しており、それと対立する優位のカテゴリーとして健康、生、秩序、文明、理性、西欧などの概念がある。ショーシャ夫人は病気や無秩序をはじめとする劣位のカテゴリーに属する存在であり、西洋的理性に反するもの、ハンスが近づくべきでないものにカテゴライズされる。セテムブリーニは反西洋的存在としてショーシャ夫人の背後にあるロシアを嫌っているが、ベルクホーフではロシア人は二種類の等級に分かれており、それに応じて食事の際は上流ロシア人の食卓と下流ロシア人の食卓が別々に設けられている。このうち「下流ロシア人席」に陣取るロシア人たちに対しては、ハンスもまたセテムブリーニ流の差別意識を抱いており、それはたとえば「彼らが食物をナイフに刺して口に入れたり、トイレットを口に出すこともできないようなやり方で汚したりするから」(5.1-347)だった。し

かし、ロシア人全般を非難するセテムブリーニと違って、ハンスはショーシャ夫人が属する「上流ロシア人」と「下流ロシア人」のあいだには「截然たる区別」(5.1-347)があると考える。ベルクホーフに來たてのころはショーシャ夫人がいつもドアを叩きつけて閉じることに憤激していたハンスだったが、愛ゆえに今ではまったく気にならなくなっていた。

病気を美化するロマン主義的な考え方、すなわち「病気は人間を高尚で賢い、特別な存在にする」(5.1-149)という考え方をハンスが述べると、セテムブリーニはそれに答えて、「病気は決して上品でないし、尊敬すべきものでもありません。——そういう考え方はそれ自体すでに病気であり、あるいは病気の元凶になるものです」(5.1-151)と語る。セテムブリーニが口をきわめて病気をあしざまに言い、結核のロマン化に反対するのに対して、ハンスは病気に身をゆだね、結核のロマン化を身をもってなぞっていく。ハンスはセテムブリーニの理性重視の西洋的価値観が一定の正当性をもつことを受け入れているが、それと対立するロマン主義的・東方的価値観につよく惹かれている。後にショーシャ夫人の新たな恋人として登場するオランダ人ペーベルコルンという人物に夫人についてどう思うか尋ねられると、ハンスは病気を「天才的な原理」と呼び、ショーシャ夫人に「自由と天才を与えているのは病気なのです」(5.1-923)と語っている。無為と安逸に身を委ね、セテムブリーニが悪徳として嫌う葉巻を楽しみ、肺に空洞をもつ美しいロシア女性を欲しているという具合に、サナトリウムでのハンスは大筋においてセテムブリーニが勧めるどころと逆の道を歩んでいる。それでいて、ハンスを「人生の厄介児童」(5.1-467)と呼び、何かにつけて叱咤を怠らないセテムブリーニの父性的性格をハンスは必要としている。セテムブリーニに背いてショーシャ夫人への思いを遂げた一夜の後、セテムブリーニとの関係は気まづくなる。しかし、ハンスはセテムブリーニが姿をあらわすと一瞬で病室が明るくなるような(5.1-535)その啓蒙的な感化力をひそかに慕っていたので、何週間かの後にこのイタリア人が突然なれなれしい調子で「エンジニア、ざくろの実の味はお気に召しましたかな？」(5.1-536)と決定的な一夜のことをあてつけると、途端に相好を崩すのである。

すでに述べたように、ハンスはサナトリウムに居座る多くの理由をもっている。予定されていた造船技師という仕事に対してもあまり意欲はない。セテムブリーニはことあるごとにハンスをエンジニアと呼び、社会的職責を果たすべく下界に戻ることを要求する。セテムブリーニにとって仕事とは、病気を天国への入場券とみなしたような中世の迷信への戦いである。仕事とは現世における仕事、人類の荣誉と福祉のための仕事であり、人類に進歩と文明への道を用意するものだとセテムブリーニは語る。(5.1-151)セテムブリーニの仕事へのこだわりは一見すると地上的な価値観に偏したところから出ているようだが、その仕事観の根幹をなす思想はある程度は超越的なものへの敬虔な心情と結びついているようである。すなわち、セテムブリーニは、時間の浪費を「アジア的」と呼び、「神聖な西欧の息子」(5.1-368)は貴重な時間を活用しなければならない、「時間は神々の贈り物であり、人間が利用するために貸与された贈り物なのです」(5.1-369)と語っているのである。



セテムブリーニは根っからの教育者気質で、「他人に影響を与えることを願って」おり、ハンスはハンスで「影響を与えられることを求める」(5.1-228) 徒弟の人間である。セテムブリーニは何でも知っているような様子ですべてを断定的に語る。ハンスは教育途上の人間らしい謙虚な「心の規範」(5.1-239) をもっているの、「彼自身の敬虔さや嗜好からは抗弁したくなるようなセテムブリーニ氏のものの考え方に対しても何も言わない」。(5.1-239) しかし、反抗的な気持ちもひそかにあり、よく見る夢のなかでは「すでに何回となくセテムブリーニ氏を真正面から『手回しオルガン弾き』と罵ったり、全力で向こうへ追いやろうとした」。(5.1-244) しかし、ハンスはセテムブリーニの話を高尚と感じており、まだ仮滞在だった時期にセテムブリーニの面前で、ヨアヒム相手に「もっとよくセテムブリーニさんのお話を伺って、いろいろ勉強させていただきたいので、このまま熱が下がらないで末永くこちらに滞在したいと思うんだ」(5.1-307) などと追従まがいのことを言い、セテムブリーニからは「あなたはなかなかの曲者ですね」(5.1-307) と皮肉られる。セテムブリーニは「高尚」な話をする一方で下世話な話にも通じているので、社交の場でなかなかの人気を博していた。「彼はなんでも知っていた。新米患者の名ばかりか、彼らの境遇もおおよそは心得ていた」(5.1-232) のである。

ショーシャ夫人の出発のしばらくの後、かねてよりベルクホーフを嫌っていたヨアヒムは決して軽い病状ではないのに、ベーレンスに退院を申し出ることになる。ハンスが付き添っていると、一方的なヨアヒムの退院宣言に怒って興奮したベーレンスは、次に診察したハンスに対しても、肺の患部はすでに治癒しているし、発熱の原因は不明で「もはやたいした心配もいらない」ので、「あなたも出発してよらしい」(5.1-631) と捨て台詞を吐く。このベーレンスの言葉には実はかなりの真実が含まれていた可能性もあるのだが、ショーシャ夫人の帰還を待つつもりだったハンスに出発する気はなかった。そこで、ハンスは後日、ベーレンスの機嫌がよいときを見計らって、「自分はまだ37度8分の熱があり、正当なやり方で釈放されたように思えない」(5.1-636) と伝え、首尾よく療養の続行を認められる。

第一部において、セテムブリーニは一貫してハンスがサナトリウムに居座ること、そしてその大きな動機であるショーシャ夫人への恋慕に反対しつづける。ベルクホーフには「アジア的なものが充満しています——モスクワ系のモンゴロイドがあふれています」(5.1-368) とセテムブリーニは吐き捨てる。アジア的なもの、その一部分であるロシア的なものとは「時間を扱う上でのいい加減で野蛮な放漫ぶり」(5.1-369) であり、「柔弱で腺病質であるために、この地にたくさんの病人を送りこんでくる東方の振舞い」(5.1-370) にハンスは決別すべきだとセテムブリーニは説く。ベルクホーフにおいてセテムブリーニが憎んでやまないロシアを象徴する中心的存在はショーシャ夫人であるが、どんなに叱咤されても、ハンスは夫人への思いを断ち切ることはできない。ショーシャ夫人へのハンスの思慕は、秩序と勤勉を旨とする北ドイツ人の、混沌と放埒を旨とするアジア＝ロシア人気質という反対物への求愛であり、引いては病と死へのロマン主義的な憧憬なのである。

## VII. さかさまの世界

「人生の厄介児童」がサナトリウムを去る機会は何度もあった。ショーシャ夫人やヨアヒムのような軽症とはいえ患者が次々に出発したことは、彼らよりもはるかに軽症のハンスに刺激を与えたはずだった。続けて、あまり年が違わず、兄弟のように育った叔父のティーナッペルが来訪してきたこともハンスの出発を促してよいはずの出来事だった。ヨアヒムが去ってまもなく「突然に故郷の代表にして使者」(5.1-644)である叔父が「視察の任務を帯びて現れた」(5.1-644f.)のである。ヨアヒムが当地でのハンスの様子をハムブルクに戻ってから親戚に伝えたことで、サナトリウムという「悦楽の園」に居ついてしまったハンスをそこから引きはがし、帰郷させるための「攻撃の時機が熟し、到来した」(5.1-645)のである。叔父はハンスに会うなり、この甥が「きわだって健康で元気そう」(5.1-647)なのを見てすぐに帰郷できるだろうと言うが、これに対してハンスは「一点の曇りもない治癒が問題」(5.1-647)としたたかに距離を置く。ティーナッペルは到着早々サナトリウムが自分の住む実社会とはまったく別の世界であることを痛感し、そこから甥を引きはがすのが至難であることを予感して気が滅入る。しかも、食事のときに患者たちのあいだを回って声をかけるのが習慣のベーレンスからは、顔を見るなり高度の貧血があると宣告され、甥を見習ってしばしここに滞在するように勧められる。実際、ハンスが到着早々高山の空気にやられて高熱を發したのと同様に、ティーナッペルは寒気がするようになっていた。さらにハンスがショーシャ夫人に到着早々惚れこんだように、まだ年若い叔父も来訪してすぐに魅力的な乳房をもつポーランド女性に深い関心を抱くようになる。(5.1-659)しかし、ティーナッペルはハンスと同じ道を歩まず、誰にも告げず、「律義者の、平地の旗への逃亡者」(5.1-661f.)としてこっそりと出発してしまう。ティーナッペルもまたハンス同様、ベルクホーフで「魂の奥底まで揺り動かし、感動させる」(5.1-659)一人の夫人を見出し、近づくことさえできたのだが、正業をもつ家庭人としての分別が勝ったのである。

ティーナッペルを恐れさせたのは、悪寒などの身体的な不調よりもベルクホーフの隅々まで行きわたった倒錯的な雰囲気である。それはまさに病気を基軸とし、核心とする価値観から生まれる雰囲気である。それはティーナッペルのような一時的な滞在者をもたちどころに洗脳し、下界の生活を「まったく間違った、不自然で許されざるもの」(5.1-662)と感じさせ、この上の世界に釘付けにする魔的な力を生んでいる。ベルクホーフの序列は低地のそれと逆で重症者ほど尊敬され、軽症者は肩身の狭い思いをする。ベルクホーフには差別的精神があり、「軽症者は軽んじられていたのである」(5.1-310)。セテムブリーニはハンスがはじめてレントゲン撮影をしたとき、「あなたの病気はもうそんなに上のレベルまで来たんですか」(5.1-338)と皮肉を言うが、これは療養所内の病気をよしとする価値観に故意に沿って言われたものである。セテムブリーニ自身はベルクホーフの大勢となっているそうした価値観に反感を抱いていて、

「ここでは誰もが病気の重さをいやらしく競うので、私は吐き気がします。それで、私はあなたのご自分の病気のことを言うときに私自身のことを言いませんでしたが、本当は私はあなたよりはるかに重症なのです」と語る。(5.1-377) 続けてセテムブリーニはそれでも自分は自分の「みじめな肉体のこのような専横」(5.1-377)に屈服せず、啓蒙主義者の文筆家という「私の仕事の世界はきわめて自由で精神的なものですから、私は命の続くかぎりは人類のために尽くし、病気の精神に抗していけるのです」(5.1-377)と語り、ひるがえってハンスについて「あなたは肉体とそれがもつ悪しき性癖に嬉々として従ってしまっているのではないのでしょうか」(5.1-377)と危惧を漏らすのである。

## VIII. サナトリウムでの教養形成

ハンスはベルクホーフの医療者と患者が結託して作り出す病んだ世界<sup>22)</sup>につよい親和性を持ちながら、他方ではいとこのヨアヒムのドイツ的・軍人的な素朴で生真面目な気質や、セテムブリーニの啓蒙主義的な理性、健康であろうとする意志に一定の正当性を認めている。ハンスの病んだ世界との融合はショーシャ夫人との情事で頂点に達し、セテムブリーニとの関係を毀損するが、すぐにそれは修復され、後述する第6章の吹雪のさなかでの啓示においていったんは生への決意が力強く宣言される。それはもしセテムブリーニが聞いたら大喜びするような、いわゆる健全な思想への決意だった。

『魔の山』の語り手は、セテムブリーニにロマン主義的な病気観の退廃を批判させる一方で、ハンスがサナトリウムに滞在し、ありあまる時間のなかで病気と死について思考をめぐらし、思想的な修練をつむことを是認している。療養施設という特殊な空間における「教養小説」としての『魔の山』は、この是認を基盤として成立している。ヨアヒムは病身ながら軍人らしい、「健全」そのものの人生観をもって、サナトリウムを「腐った沼」(5.1-29)と呼び、軽症とはいえない結核であるにもかかわらず「下山」し、軍人の生活に戻ってしまう。すでに述べたように、これはその時点で一年ほどをサナトリウムで暮らしていたハンスにとっても世俗の義務や仕事に戻るチャンスだった。しかし、ハンスはもともと帰属すべき場所がはっきりしているヨアヒムの場合とは違って、自分の場合は下界への帰還が「逃避」になると考える。このハンスの考えは通俗な地上的価値観から見れば驚くべきもので、常識的な見方では軽症のハンスがサナトリウムに滞在することこそが「逃避」であって、下界に戻ることはその逆の「復帰」とか「更生」と呼ばれるべきものである。しかし、語り手はハンスの倒錯的といえなくもない考えを完全に是認し、ハンスの「下山」は「神の子である人間 (Homo Dei) と呼ばれる高位の被造物を観照することによってこの高地で生じ、増大した責任からの逃避」(5.1-635)であると断じ、そのサナトリウム生活を人間的な修練の場として肯定する。この高踏的ともいえる語り手の観点からすれば、ハンスがサナトリウム生活で得られるものはたしかにいくらかでもあ

り、ショーシャ夫人との愛の成就がもたらした性的な面での成長や、セテムブリーニやユダヤ人ナフタのような博識な文化人との交際から得られる知的修練、死と病が日常的にある環境がもたらす精神的な啓発、さらには愚かしく、いかがわしくさえあるサナトリウムの実態を観察することからくる人間性への洞察などがその実例として挙げられる。万全の信用がおけない医療者たちにも一理ある発言はあり、たとえば精神分析医クロコフスキーが「まったく健康な人間など、私は未だかつてお目にかかったことがありません」(5.1-635)と言うのにしても、いくばくか常識的な通念をくつがえす教育的意義のある言葉である。ハンスは、セテムブリーニがその汎性欲論ゆえにいかがわしいと断罪する分析医クロコフスキーにもひそかに惹かれるようになり、既述したように精神分析を個人的に受けるためにその「分析用の穴蔵」(5.1-556)を訪れるようになる。

ハンスは安逸に流れやすい性格で、創造に向かうほどの情熱にも欠けているが、彼なりの誠実と真摯をもって真実を探ろうとする衝動を抱いている。気ままな生活を好む一方で、ハンスは「規律がなければならない」(5.1-446)というヨアヒムの軍人的克己の精神に対しても共感を示すし、「苦悩と死を真剣に受けとめ、尊重してしかるべきだ」という精神的欲求がとりわけて強かった」(5.1-449)ので、ベルクホーフの住民たちのなかにいる「病人の生活が気に入っていて、ただ安楽だからということでここに暮している連中」(5.1-449)をサナトリウムの品位を傷つける存在として感じていた。ハンスはセテムブリーニが「自由な精神の方向」を標榜し、「人間の品位を自分だけがもっているように思っている」(5.1-445)と考えて反発するものの、その克己心にみちた厳しい教育者的な姿勢には一目を置いていた。ショーシャ夫人の奔放に惹かれ、安楽な生活に浸る一方で、ヨアヒムと対話するときのハンスは、「階級と服従」,「スペイン的精神」,「敬虔な態度」(5.1-446)は「好ましいものだし、それはそうであるべき」(5.1-446f.)とうそぶき、この世では「万人が黒い服を着て、君たちのカラーよりももっと上を行って、糊で固くした首飾りをつけ、真摯に、抑制した態度で礼儀正しく、死を思いながら互いに付き合うべきだ」(5.1-447)とわけ知り顔で持論をぶつ。たしかに、解体である死ではなく、厳格な儀礼としての死への畏敬は、早くから死に親近していた孤児ハンスの身に備わったものである。さらに目立たない叙述だが、ハンスの矛盾にみちた両価的な精神のなかに存在している真摯な傾向を物語るものとして、ハンスがベルクホーフに滞在しつづける意外な理由がある。それはここでしっかり病気を治し、「二度と再びここに戻らなくてすむようにするため」(5.1-529)という理由であり、語り手はこれを強調して「これこそはまさに彼の滞在の意味だった」(ebd.)と述べる。ハンスの長逗留には、ショーシャ夫人への恋慕やベルクホーフの退嬰的な雰囲気性が性分に合うなどの必ずしも堂々と公言できない、いかにもハンスらしい理由のほかに、人生探求という理由があることはすでに確認したが、いささか滑稽な趣をもつその人物設定のなかにあって、語り手が「まさに彼の滞在の意味」であるとするこの優等生的な逗留理由は、いくばくかの違和感を醸し出すものである。しかし、この意外性こそはハンスの両価的

な性格の真骨頂を示すものであり、退嬰的である一方にこうした真摯な部分があってこそ、自己形成という主題をもつ教養小説の主人公にまがりなりにもなり得ているといえる。

マンはハンスの物語が教育の物語であり (*Einführung in den „Zauberberg“*, XI-613), ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』と同じく教養小説の典型である (XI-616) と語っている。教養小説については浩瀚な研究が存在するなかでその定義は必ずしも完全に明確ではないが、大方の了解事項としては、教養小説とはディルタイが述べたように、一人の青年が人生に足を踏み入れ、「多様な人生経験を経るなかで成熟し、自己自身を発見し、世界におけるみずからの使命を確信するに至る」<sup>23)</sup> 過程を描いたものであるということができよう。ハンスの物語は一応この定義に合致していると見ることができるが、『魔の山』におけるその「人生」は、教養小説の範例とされる『ヴィルヘルム・マイスター』やケラーの『緑のハイリヒ』などで描かれる開かれた実社会での人生ではなく、隔離された病者が形成するベルクホーフという無気力と退廃が広がる特殊な社会の人生である。元来は活動的な生が営まれる世俗の社会のなかで自分を見出す道程を描くのが教養小説の定石だが、『魔の山』はマン自身が言うようにむしろ社会と対立する密閉された実験室のような空間における「錬金術」<sup>24)</sup> としての教養課程を描いている。すでに見てきたように、ベルクホーフは「下界」の一応は開かれた世界と逆の特殊な価値観が支配する世界である。この世界でのハンスの7年間を教養小説的に意義深い人格形成の時間と見るためには、世俗的な観点からはほとんど無為ともいえる生活のなかに精神的な面での有意義性が存在するという観点が必要となる。そのような、世俗の価値観といくばくかは乖離する観点があってはじめて、7年にわたるハンスの修業時代を、生計維持のための勤労に追われるような生活のなかでは得られないさまざまな経験、死に近接した環境のなかでの脱俗的な思索のための価値ある時間として見るのが可能になる。

すでに見たようにベルクホーフの患者たちの大半は「高尚」なことと無縁の人々であるが、それにもかかわらず、もともと病気を美化するロマン主義的な心情を抱くハンスは、サナトリウムで営まれる遊民的な生活は、精神的に望ましいものであるとすら主張するようになっていく。たとえばハンスはセテムブリーニに向かって、自分のように幼時から死に親しむ人間は、「あちこちに顔を出し、笑ったり、金儲けをしたり、たらふく腹に詰めこんでいるような世間のどこにでもいるような人たちの残酷さ」(5.1-303) に違和感をもたざるを得ないしたり顔で語る。ハンスはベルクホーフでの生活をとおして下界の実際的な生活をひたすら残酷で、知性に欠けるものと感じるようになっていくのである。そして、完全に間違っているわけでもないが、反社会的とも独善的ともいえるこのような感受性のありかたは、結果的にハンスを勤勉実直な市民気質から遠ざけ、俗世間での生活に堪え得ない知的で繊細な遊民的教養人のような存在に仕立てていくのである。

19世紀初頭に『ヴィルヘルム・マイスター』が成立したことが示すように、市民社会のなかでの個人の自己形成を描く教養小説は、個人主義とそれに基づく市民社会の発展という、啓

蒙主義に由来する観念が時代の動力源となっていた近代の勃興期にいかにもふさわしい文学ジャンルである。これに対して、『魔の山』が書かれたのは、それからほぼ一世紀を経た時代、人類の進歩や発展という観念がつよい力をもった時代がすでに遠い過去のものとなり、ロマン主義や世紀末の退廃を経て市民文化が爛熟し、崩壊しつつある時代であった。市民社会のなかで個人が成長し、みずからのライフワークを発見するという古典的な教養小説の構想は、個人と市民社会のそれぞれの発展が予定調和的に実現されうるといふ近代勃興期の楽天的な観念のなかでなければ容易に成立しがたいものである。すでに小説の冒頭に近い部分で語り手は、『魔の山』の舞台である第一次大戦を前にした時代を、「外見上どんなに活気があろうとも、根本的には希望も展望もまったくない」(5.1-54) 時代であると総括していたが、これは伝統的な教養小説として立つ困難を作品みずからがその出発点で語るものだった。『魔の山』はこうした困難にもかかわらず、教養小説を書こうという作者マンの野心によって成り立っている。『魔の山』が描く、社会から隔離された密閉された空間における錬金術としての教養課程は、正統な古典的教養小説が不可能になった時代における教養小説の可能性を追求した結果であるといえるだろう。サナトリウムでの7年にわたるハンスの修業時代は、営利活動としての仕事が人生の基盤であり前提であるとする市民社会的な観点からすればほぼ無為と言えるものだが、物質面から切り離された精神活動を高く評価するような「錬金術」的観点からは、内面的な価値が蓄積されていく貴重な時間と見なしうるのである。

サナトリウムでの教養課程は、結核を核心として形成される密閉された価値転倒的な空間のなかで展開される。「標高5000フィート」(5.1-569)にあるその空間は非日常が日常と化した空間であり、世俗的な常識では放埒であったり不健全であったり怠惰であったりすることが当たり前のこととして流通する場所である。そこでは健康や勤勉実直をよしとする平地の価値観は必ずしも当たり前のことではなくなる。病気であることにやましさを覚えないですむ雰囲気の中で、もともといわゆる堅気の仕事や健全さという市民的な価値に違和感を抱くハンスは自分本来の居場所を見出した気分になる。ハンスは誠実であると性格づけられると同時にマンの主人公たちにありがちなトリックスターのな性格をもっている。開巻劈頭、「単純な青年」として紹介されたハンスは、物語の進行につれて、ときに「曲者」(5.1-307)と呼ばれ、ときに「人生の厄介児童」(5.1-529)と呼ばれる。単純な外見の裏に一筋縄でいかないしたたかさを秘めており、加えて世俗から乖離した「教養」への意外なほどの熱意をもっているようである。

到着して間もないころ、人文主義者セテムブリーニの博識と能弁は、エンジニアでそれまであまり人文学に縁のなかったハンスを感心させ、「こんな大したことを人と議論し、しかも理解さえできるようになろうとは思ひも寄らなかつた」(5.1-307)と言わしめる。常にサナトリウムを罵倒し、市民的生活に復帰することを勧めるセテムブリーニの存在は教養の道へとハンスを誘い、皮肉なことにハンスをサナトリウムにとどまらせる要因の一つになる。さらに第二部からはこのセテムブリーニに、その論敵で博識なユダヤ人のイエズス会士ナフタを紹介さ

れ、ハンスは二人の白熱する議論を聞きながら複雑な知の世界に触れるのである。

理性を重視し、西洋を礼賛し、勤儉と節度を尊び、平地への帰還を説きつづけるセテムプリーニに対して、ハンスは心情や、東方＝ロシアの価値を内心で擁護し、安逸と放埒が支配する高地ベルクホーフへの愛着を捨てることができない。セテムプリーニは、多くの若者がベルクホーフに居心地のよい「故郷」を見出し、平地に戻ってももはやそこに適応することができなくなってしまうことを実例つきで語る。(5.1-302) このセテムプリーニの常識的で世俗的ともいえる教育者性は、西欧的理性とロマン派的精神という二極のあいだを揺れ動く「教養小説」としての『魔の山』を形成する一方の中心点である。死と病に惹かれるハンスは、セテムプリーニの常識性に辟易しながら、他方でその理性信仰を自己崩壊から自身を守る最後の砦として認めている。それでもセテムプリーニの忠告に反してハンスはベルクホーフに居つづけ、7年間をセテムプリーニ的価値観からすれば無為のなかで送る。最初のころは目新しいことが次々と起こり、精神的な刺激のなかで「有意義」なものに見えたサナトリウムでの生活も、滞在が7年を迎えるころには、すでに啓発されることも少なくなり、本人にとっても退屈な、無為徒食としか感じられないものに妥容していく。精神的な冒険としてハンスのサナトリウム生活をほぼ一貫して擁護してきた語り手も、滞在末期のハンスの陰鬱で停滞した生活のありようについては、「悪癖となった時間の無駄使い、永遠との悪しき戯れ」(5.1-826) ときわめて否定的に語るようになっていくのである。

## IX. 「教養小説」の終わり

『魔の山』は7章から成り立っているが、第6章でいかにも「教養小説」にふさわしい、人生肯定的な一つのピークに達する。つまり、そこで雪のなかにスキーで出かけたハンスは吹雪に出会い、瀕死の状況下で生と死に関する暗示に富んだ夢を見、「人間は善意と愛を大切に守るべきで、死に思考の支配権を委ねるようなことはしてはならない」(傍点は原文ではイタリック体——論者注、5.1-748) という認識を得る。ところが、この決定的に重要に見える認識はすぐに忘れ去られ、ハンスにとって大きな打撃となる出来事がそれに続く。ベルクホーフを去って軍隊に復帰したヨアヒムは、ショーシャ夫人が不在のあいだに回復不能の重症となってサナトリウムに戻り、実直一筋の生を終えるのである。この出来事のあと、ハンスは「自分が何歳になっているのか、どんなに真剣に、長いあいだ考えてみてもわからない」(5.1-819) というような精神の昏迷に陥る。ところが、そんな寄る辺ない状態のハンスにカンフル剤のように作用する椿事が出来る。ショーシャ夫人が、ペーペルコルンという王者のような風格をもつオランダのコーヒー王の愛人となってベルクホーフに戻ってきたのである。待望の恋人の帰還は大きな失望に変わったはずだが、ハンスはある程度苦しんだあとは、ほとんどショーシャ夫人そっちのけでこの存在感あふれるコーヒー王に心酔し、セテムプリーニやナフタという教育係

をもおろそかにしてコーヒー王のカリスマ的な人格に感化されるべく進んで身をさらす。しかし、ハンスが教養小説的な人生体験への意欲を示しているのはここまでである。生命力の喪失に苦しむペーペルコルンが毒で命を絶ったあと、ハンスの精神はあてどもなく漂い始める。第一次大戦に向かうヨーロッパ情勢を映し出すかのように、サナトリウム全体が加速度的な精神的荒廃に陥るなかで、ハンス自身も無気力と憂鬱に沈み、焦燥にかられていくのである。さらなる追い打ちのように、ナフタがその悪意にみちた虚無的な思想の帰結としてピストルで劇的な死を遂げるのをハンスは目撃することになる。終結部において7年目のハンスはすでに「完璧にここの住人以外のなにもものでもない人間になってしまい、ほかのどこへ行けばいいのかはとっくの昔に皆目わからなくなり、平地に戻るなどということは考えも及ばないことになっていた」。(5.1-1071)

そもそもハンスはいつからとなく下界に戻ることを恐れるようになっていたようである。これよりはるか以前、ベルクホーフ滞在半年の時点で、結核患者であるがゆえに下界への復帰をハンスがすでに恐れるようになっていたと推測させるくだりがある。大学生であるペーレンスの息子が学友たちと連れ立ってダヴォスにやって来るのだが、ハンスはそれらの健康な大学生たちと鉢合わせするのを恐れ、避けるのである。それについて語り手は、「ここの上の世界に属する者の一人であるハンスは、歌ったり、山歩きをしたり、ステッキを振り回すこれらの若者たちとはまったく別の世界の住人だった。彼はこうした輩については何も聞きたくなかったし、知りたくなかった」(5.1-435)と述べている。補足しておく、この若者たちの多くは北ドイツの出身だった。語り手はハンスの感情を「同郷人に会うことへの極度の恐れ」(ebd.)と説明している。ほとんどサナトリウム内で完結するハンスの物語のなかにあって、この出来事は伝染病患者としてのハンスが、サナトリウム外の同年輩の健康な若者との接触を忌避する心理を描いた唯一のものである。死亡率が高い感染症である結核に罹患した者は、結核のロマン化などといった観念と無縁の人々からはあたかも犯罪者のように忌避され、差別される存在だった<sup>25)</sup>。『魔の山』は病気であることが価値となるような倒錯した世界としてのサナトリウムを描いているが、健康な若者たちに対するハンスの忌避感、実は結核患者が多くの場合に一般社会から忌避される存在だったこと、しかもハンスがそのことに自覚的であったことを示唆している。さらに勘ぐれば、ハンスの若者たちに対する恐れには、その療養生活がどうしてもそれを必要とするほどの病状ゆえのものではなく、少なくとも部分的にはベルクホーフの居心地のよさゆえにみずから進んで選んだものであるということのやましさも介在しているだろう。ハンスの自己形成の物語は、都合よく周到に外部世界を排除した精神によって開始され、進行していくのである。

あまりにも長い療養生活はハンスの精神を漸次的に疲弊させ、鈍化させていった。ペーペルコルンの死後、ベルクホーフを去って行ったショーシャ夫人の存在をはじめとして、滞在初期のハンスをベルクホーフに引き留めることになったいくつかの理由は今はほとんど失われ、



ハンスは平地に帰還する理由もきっかけも見出すことができないままに惰性でベルクホーフに居座っているのだった。7年間のあいだにハンスは食事のテーブルを次々に替わったが、最後にもっとも無規範で放埒な人々からなる下流ロシア人席が彼の定位置になっていたことは象徴的である。物語の最後においてすでに下界からも忘れ去られ、そこに戻る理由も失っていた30歳のハンスは、第一次大戦の勃発に際し、ドイツ帝国の臣民たちの戦争への熱狂にひきずられるようにして兵役を志願し、砲弾が炸裂する戦場に身を投じ、硝煙のなかに姿を消していく。

著名なマン研究者のハンス・ヴェスリングは、ハンスの物語を万事に消極的な人間の人格喪失の物語であると総括し、教養小説の範例とされる『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』が活力をもつ人間の目的意志の物語であることに照らして、『魔の山』が教養小説であることを否定する見解を明らかにしている<sup>26)</sup>。この見解の当否を論ずることはここでは差し控えるが、仮にハンスの物語が大筋において主人公の自己形成を描く教養小説であると考えとしても、教養小説としての『魔の山』はペーペルコルンの自裁をもって事実上終わっているということはいえるだろう。存在感にあふれ、周囲の者を祝祭的な昂揚に巻き込んでいくペーペルコルンは、ヨアヒムを失ったハンスの喪失感と憂鬱を埋めるものだった。セテムブリーニやナフタのように整然たる論理を展開することはないが、図抜けた存在感をもつペーペルコルンという人物を前にすれば、かまびすしい二人の論客たちも完全に霞み、ハンスへの影響力を失ってしまった。そのペーペルコルンが内実は病苦と衰弱に蝕まれており、みずからの存在を持ちこたえることができずに毒をもって自裁したことは、ハンスのなかにそれまでであった建設的な自己形成衝動を決定的に毀損するものだったかもしれない。マンはみずから『魔の山』を教養小説と規定しながら、ペーペルコルンの自裁以降のハンスに教養小説的な自己探求の姿勢を放棄させ、この主人公をひたすら退嬰的で現実逃避的なトランプ遊びや音楽、心霊術への耽溺に向かわせ、最終的には動機の不明瞭な戦場への志願に至らしめている。

これほど兵士に適さない人間も滅多にいないのにもかかわらず、過酷な戦場にハンスを向かわせたものは何だったのだろうか。そもそもベルクホーフに来る以前、まだ学生だったハンスにも兵役に就く機会があった。しかし、当時のハンスに軍隊への興味はなく、兵役は「自分の天性に反する」(5.1-57)ものだったので、軍隊に行くことはなかった。すでに老兵といえなくもない30歳のハンスを、ほとんど死が必定と見える苛烈な戦場に赴かせたものは何だったのか。ドイツ国民の熱狂の渦のなかにあつてハンスの心にもつよい愛国心が生まれたとも考えられるが、この小説のなかでそうした問題がまったく取り扱われていない以上、それは物語の展開の上で唐突にすぎる。あるいは、ハンスの資質となっていた死への親和性が、大々的な死の饗宴である戦争に共鳴し、赴かしめたと考えることもできないではないが、国家共同体のなかに融解するような死のかたちは、サナトリウムを支配していた自由な価値観のなかで進行してきたハンスの「教養形成」と符合するものではない。ハンスに限らず、ベルクホーフの患者たちは戦争の勃発とともにおしなべてあわただしくそれぞれの祖国に戻っていくのだが、

ハンスを含めたその患者たちをしてベルクホーフから脱出させたものは、個人的なものと無関係な歴史の力であり、「荒々しい外部の力」(5.1-1079)だった。語り手は、ハンスが戦争によってようやく長すぎた療養生活を終え、現実の世界に戻っていくことについて、「彼は魔法を解かれ、救済され、解放された」(ebd.)と述べ、ここには「何か神の慈悲や公正さのようなものが顕現している」(ebd.)のではないかと推測し、「人生は再びこの罪深い厄介児童を引き取ろうとした」(ebd.)が、ただし、「天罰」(ebd.)のかたちでと述べている。ここで、語り手がハンスという人間を「罪深い」と形容し、ハンスの療養生活を「天罰」を受けるに値するものと断じた上で、しかし、「慈悲」によってここで戦争が勃発し、ようやくハンスは罪から解放され、救い出されようとしているのだと語っていることは注目に値する。サナトリウムでのハンスの自己形成を一貫して価値あるものとして擁護してきた語り手は、終結部ではその立場を変化させ、ハンスの不必要に長かった療養生活を悪しきものである、少なくともいつからか悪しきものに変容していたと語っているのである。語り手はハンスが7年間の療養の後に、かつては快適だったサナトリウムでの生活をつまらない、絶望的なものと感じるようになっていたこと、耐えがたいだけでなく、罪の色合いをさえ帯びたものになっていたことを、そして何にせよ、たとえ戦場で死ぬにせよ、それによってサナトリウムから脱することができるならば、ハンスにとってそれこそがほとんど唯一無二の救済になってしまったことを示唆している。

ハンスの物語を「教養小説」として支えてきた反世俗的で内面的な価値観がここで破綻したといえは言い過ぎかもしれない。しかし、ハンスのベルクホーフでの滞りがかつては意義あるものだったとしても、あまりにも長い特殊な閉ざされた空間への滞在は、それを人間形成の上で刺激に乏しい、耐えがたく退屈なものにしてしまっていたのである。ハンスの兵役志願は、ベルクホーフを出て下界に戻ることが不可能になったような閉塞状況からの脱出が一つの動機だったことはたしかである。少なくとも、世俗から隔絶した環境で自己形成を追求してきた結果として、実社会への復帰の道が閉ざされてしまったハンスの絶望感が、自暴自棄的な戦場への志願を行なわせた可能性があることは否定できないだろう。小説全体の解釈にとって決定的に重要な問題であるにもかかわらず、語り手はハンスが戦場を志願した動機を明確には語らず、読者の推測に委ねているようである。

注目すべきことに、みずから『魔の山』をドイツ教養小説であると標榜したマンは、ほかならぬその作品のなかでその教養小説を特徴づける自己形成のエートスへの批判を登場人物に語らせている。ベルクホーフに帰還後、自分が連れて来たコーヒー王ペーベルコルンにハンスが嫉妬するどころか、その人格に心酔し、仲良くするのがショーシャ夫人の女心には面白くない。そこで、夫人はハンスの情熱の欠如を批判し、次のように語るのである。

あなた方ドイツの男性は体験のために生きているんですからね。ほかの国の人からはそんなふうに言われているのよ。情熱っていうのは自分を忘れることよ。それなのに、あ

なた方ドイツ人にとって問題なのはまずは自分を豊かにすることがなんですからね。まさにそういうことなの。あなた方ドイツ人はそれがいやらしいエゴイズムで、いつかはそのせいで自分たちが人類の敵になるだろうということをわかっていないんだわ。(5.1-899)

ショーシャ夫人の言葉は、教養小説の根本にある体験への欲求、すなわち自己形成への欲求に対する激的な批判である。自己自身を何よりも重視し、豊かにしていこうという人生態度は、称揚されることもあるが、見方によっては我執にみちた忌むべき人生態度といえる。情熱、すなわち他者への没我的な愛情こそを欲し、善しとするロシア女性ショーシャ夫人から見れば、それは体験至上主義の「エゴイズム」にしか見えないというのである。作者みずから教養小説と称する『魔の山』は、このロシアから来たショーシャ夫人の言葉をとおして、ドイツ教養小説の根底をなすエートスに痛烈な批判を突きつけているのである。

## X. ハンスの結核とは何だったのか

それにしても、ハンス・カストルプをサナトリウムに引き留め、世俗的観点からは無為に見える7年間の療養生活を続けさせ、そこでの人間形成を描くことが『魔の山』という「教養小説」を生み出すことになったそもその原因であるハンスの結核とは何だったのか？ これまで見てきたように、ハンスの療養生活は最初から最後まで帰還も可能な程度に軽症だったハンスがみずから選んだものだった。もちろん、ベーレンスの診断や忠告が全面的な虚偽だったわけではなく、たしかに最悪の場合ハンスの結核が重症化する可能性があったことは否定できない。しかし、「下界」に戻って仕事を基軸とする市民生活を営む十分な意欲がハンスにあったなら、明らかに経営上の理由も介在するベーレンスの勧告にやすやすと従うことはなかっただろう。

ベーレンスは、結核でない可能性すらあるハンスをベルクホーフに引き留め、療養生活を続けさせながら、他方ではこの患者がいつまでも発熱しつづけることに首をひねっていた。定期的になされていたレントゲンの結果は最初からそれほどひどいものではなかったし、療養生活をとおして改善は顕著であり、療養期間の最後の頃のレントゲン写真ではかつての病巣は吸収されるか固まった状態で、それは「治癒を意味する」(5.1-948)ものだった。最後の頃は発熱だけが問題だった。すでに見たように滞在初期のハンスの発熱は高地の空気に慣れないことが原因であると考えられたが、ハンスはその後も7年間の滞在をとおして発熱しつづけていたのである。実はハンスの「病」が最初から最後まで単にグヴォスの気候に順応しなかったということに過ぎなかったことを示唆するくだりがある。

低地(=ハムブルク——論者注)の、その気候に慣れきっていたこの市民の末裔にとって、この高地の気候に順応するというの内実は、おおむね慣れないことへの慣れだと

いうことを意味していた。……（中略）……「いつまでも慣れない人が多い」とヨアヒムは会った早々に言ったが、ハンス・カストルプの場合もそのようだった。（5.1-587）

スイス各地のさまざまなサナトリウムを転々としながら長い療養生活を送ったマンの妻カーチャは、自身の「結核」がおそらくは真正のものではなかったということのみずから明かしている。カーチャによれば、彼女の病気は肺結核の初期症状というべき「肺尖カタル」であって、「生命の危険などはありません」、サナトリウムに入らなくても「ひとりでの治療していたぐらい」で、ただ「資産家であれば、ダヴォスやアローザに送りこまれるのが、あの頃の習慣」<sup>27)</sup>だったという。ハンスの病状については、この夫人のエピソードと同様のことが執筆中のマンの脳裏にあったのではないかということは十分に推測されうる。さらに、1959年以来ダヴォスとその周辺で医師として活動し、医学的見地からマンについての幾多の論文を発表しているクリスティアン・ヴィルホフは、半世紀前に同地で療養していたカーチャ夫人の発熱について興味深い発言を行なっている。それによれば、ハンス・カストルプと同様にカーチャもサナトリウムでは長期間、高熱が続いていたが、その原因は鼻炎による熱の変動だったのではないかというのである<sup>28)</sup>。またヴィルホフは、この発熱に疑いをもったカーチャが体温計測をやめてしまったら平熱に戻ったということも伝えている<sup>29)</sup>。平熱に戻ったのはたまたま回復期だったせいかもしれないが、検温の際の緊張感や自己暗示などの心理的なものが熱の原因だった可能性も排除できない。ダヴォスの医師が結核の疑いを語ったにもかかわらず、4週間の見舞いを終えると早々にミュンヘンに戻ったほど医師の診断に距離を置いていたマンであるだけに、『魔の山』において、ハンスの結核が仮性のものである可能性を想定しながら、それが真性の結核であるかのように振舞う医師ベーレンスと患者ハンスの結託を描いたことも十分に考えられる。マンは日ごろから身体上のことは信頼できる医師に相談したり、あるいはさまざまな医師の意見を比較考量するなどして、慎重な判断を下すという習慣を身につけていた。自身医学の勉強に熱心で、ほとんど医師たちの同僚のように振舞っていたともいう<sup>30)</sup>。

マンは『魔の山』について多くの自作解説をしているが、その一つで「肺結核を土台に、その御旗のもとに更新されたドイツ教養小説とはすでにそれ自体がパロディー」<sup>31)</sup>であると総括している。マンが語るとおり、『魔の山』は主人公ハンスの結核を「土台」として成立しているが、医学的知識の豊富なマンが結核についての知見を利用し、その設定そのものを内実のないものに仕立てながら、巧緻の限りを尽くしてこの記念碑的な「結核小説」を書いているとすれば、ハンスの物語を真正の病人の物語として読む多くの読者はいっぱい食わされていることになる。『魔の山』が「教養小説」のパロディーであるだけでなく、「結核小説」としても徹底したパロディーであるとすれば、マンのパロディー精神はここに極まっているといえるだろう。

## 注

\* トーマス・マンの著述からの引用・参照箇所<sup>1)</sup>の呈示は主として次の全集に拠る。本文および注のカッコ内に巻数と分冊、頁数を示した。たとえば(5.1-10)は(第5巻第1分冊10頁)を意味する。分冊がない場合はたとえば(21-527)で(第21巻527頁)を意味する。

Thomas Mann: *Große kommentierte Frankfurter Ausgabe Werke Briefe Tagebücher*, Hrsg. von Heinrich Detering, Frankfurt am Main 2002 ~

\* またトーマス・マンの著述からの引用・参照箇所のうち、一部は上記と別の次の全集に拠るが、その場合は本文中の引用のあとのカッコ内に巻数をローマ数字、頁数をアラビア数字で示した。

Thomas Mann: *Gesammelte Werke in dreizehn Banden*, S. Fischer Verlag, Frankfurt am Main 1974

- 1) マンの生涯の宿痾であった歯痛については次の論文に詳しく記されている。Thomas Rütten: *Zu Thomas Manns medizinischem Bildungsgang im Spiegel seines Spätwerks*, In: Thomas Mann Studien, Hrsg. von Thomas Sprecher, Frankfurt am Main 2000, Bd.23, S.238ff.
- 2) マンの神経症を扱った文献はきわめて多いが、簡潔にまとまった論文として参考までに右記のものを挙げておく。Joachim Radkau: *Neugier der Nerven. Thomas Mann als Interpret des „nervösen Zeitalters“*, In: Thomas Mann Jahrbuch Bd.9, Hrsg. von Eckhardt Heftlich und Thomas Sprecher, Frankfurt am Main 1996, S. 29ff.
- 3) 自伝的エッセイ「On myself」のなかでマン自身はダヴォス森林サナトリウムでの滞在を3週間としているが<sup>2)</sup>(Thomas Mann: [On myself], In: *Über mich selbst, Autobiographische Schriften*, Frankfurt am Main, 1983, S.76), Virchowによれば正確には4週間だったという。Vgl. Christian Virchow: *Katia Mann und der Zauberberg*, In: Thomas Mann Studien, Hrsg. von Thomas Sprecher, Frankfurt am Main Bd.16, 1996, S.166
- 4) Thomas Mann: [On myself], a.a.O., S. 77
- 5) Vgl. Christian Virchow, a.a.O., S.174
- 6) Vgl. a.a.O., S.176
- 7) Vgl. a.a.O., S.181
- 8) Vgl. Peter de Mendelssohn: *Der Zauberer, Das Leben des deutschen Schriftstellers Thomas Mann*, Frankfurt am Main 1975, Bd.1, 675ff.
- 9) 福田真人 『結核という文化』 中央公論新社 2001 154頁以下, またスーザン・ソントグ(富山太佳夫訳) 『隠喩としての病』 みすず書房 1982 38頁以下参照
- 10) H.G. シェンク(生松敬三・塚本明子訳) 『ロマン主義の精神』 みすず書房 1975 85頁
- 11) 福田真人 前掲書 1頁以下
- 12) マルセル・サンドライユ他(中川米造・村上陽一郎共監訳) 『病の文化史 下巻』 リプロポート 1984 113頁
- 13) ソントグ 前掲書 50-51頁
- 14) 『魔の山』に到るまでのマンは散発的にフロイトの著作を読み、影響を受けていたが、本格的なフロイトへの取り組みは『魔の山』出版後の1925年以降になる。Vgl. Manfred Dierks: *Thomas Mann und die Tiefenpsychologie*, In: Thomas Mann Handbuch, Hrsg. von Helmut Koopmann, Regensburg 2001, S.293
- 15) 福田真人 前掲書 169頁
- 16) ソントグ 前掲書 30-31頁
- 17) マルセル・サンドライユ他 前掲書 112頁
- 18) Thomas Mann: [On myself], a.a.O., S.77
- 19) Jochen Eigler: *Krankheit und Sterben. Aspekte der Medizin in Erzählungen, persönlichen Begegnungen und essaysitischen Texten Thomas Manns*, In: Thomas Mann Studien, Hrsg. von Thomas Sprecher, Bd.33, 2005, S.97

- 20) Katia Mann: *Meine ungeschriebenen Memoiren*, Frankfurt am Main, 2000, S.88f.
- 21) a.a.O., S.93
- 22) かつて結核患者で今は憂鬱症のペーレンスをはじめとして、医療関係者たちもまたおしなべて心身のいずれか、もしくは両方を病んでいることについては右の論文を参照。Thomas Sprecher: *Kur-, Kultur- und Kapitalismuskritik im Zauberberg*. In: Thomas Mann Studien, a.a.O., Bd.16, S.200f.
- 23) Wilhelm Dilthey, *Das Erlebnis und die Dichtung*, Leipzig und Berlin, 1929, S.393f.
- 24) Thomas Mann: [*On myself*] , a.a.O., S.81
- 25) 村上宏昭 『「感染」の社会史—科学と呪術のヨーロッパ近代』 中央公論新社 2021 192頁
- 26) Hans Wysling, *Der Zauberberg*: In Thomas-Mann-Handbuch, Hrsg. von Helmut Koopmann, Regensburg, 2001, S.420
- 27) Katia Mann: a.a.O., S.85
- 28) Vgl. Christian Virchow: a.a.O., S.179
- 29) a.a.O., S.175
- 30) Thomas Rütten: *Zu Thomas Manns medizinischem Bildungsgang im Spiegel seines Spätwekes*: In Thomas Mann Studien, Hrsg. von Thomas Sprecher, Bd.23, 1998, S.247
- 31) 1926年5月25日付エルンスト・フィッシャー宛書簡, Thomas Mann: *Briefe I 1889–1936*, Hrsg. von Erika Mann, Frankfurt am Main 1961, S.256

## What was “Tuberculosis” in *The Magic Mountain*?

Shuzo TAKAYAMA

### Abstract

At the heart of *The Magic Mountain* is the protagonist Hans' contraction of tuberculosis. In the beginning of the novel, Hans arrives in Davos to visit his cousin, develops a high fever, and begins a life of convalescence as a tuberculosis patient. As a patient, Hans readily accepts a comfortable convalescence in the sanatorium, but his medical condition over a period of seven years was what could be termed mild. Because he had contracted tuberculosis, Hans was able to avoid mundane work and deepen his spiritual experiences through contact with the people of the sanatorium.

*The Magic Mountain* is considered a Bildungsroman that depicts the protagonist's self-exploration. The source of this “acquisition of education” is Hans' tuberculosis. However, even the attending physician cannot grasp the real nature of Hans' tuberculosis, and there are doubts about whether it can be called tuberculosis in the first place. Hans' illness has elements of a fictitious disease created by collusion between the sanatorium corporation that wants to acquire patients, and Hans, who was originally inclined toward death and sickness and wanted to gain a free life by becoming a sick person. In his own commentary, Mann describes *The Magic Mountain* as a parody of a Bildungsroman. But, in fact, the novel is the ultimate parody wherein the protagonist's pulmonary tuberculosis, which forms the basis of the novel, is in fact insubstantial, and the novel's world, moreover, is situated in the space between fact and fiction.

**Keywords:** *The Magic Mountain*, tuberculosis, sanatorium, Bildungsroman, parody